



カタクリ群生地開園中は場内整理などに地区のお年寄りも駆り出される。都会からの観光客と言葉が通じなかったという笑い話もあるが、自分たちも楽しみでしようがない様子だ

角館駅から秋田内陸縦貫鉄道八津駅までは3駅、約15分のローカル線の旅だ。

駅に降り立つと、八津と鎌足かまたり、二つの小集落がある。集落の裏山の山腹には約20畝の栗林が広がっている。旧西木村一帯は藩政時代から栗の栽培が盛んだったが、中でもこのあたりは土壌と栗の木の相性が特に良かったようだ。

栗林といえはカタクリの花が付きもの。いつのころからか八津・鎌足の栗林はカタクリの一大群生地となり、週刊誌で紹介されたこともあって日本中から見物客が訪れるようになった。それまで地元の人たちにとっては、毎年4月半ばのカタクリの開花はあまりに見慣れた風景で、さほど価値あるものとも思わず、よって、この地で栗の栽培が始まって300年ほどのうち、この夢の中のような情景が世間に知られるようになったのは、ごく最近の15年ほどのことなのだ。

八津・鎌足かたくり福寿草保存会の八柳正

弘会長のお話によると、はじめ、地区外の人たちが中心になってカタクリ群生地を観光地化しようという動きがあったが、その、やや性急な活動に不安を感じて、自分たちの地域のことは自分たちで考えようと、平成5年、集落の人たちだけで保存会の設立に至った。栗林を所有しない家も含めて、集落の全45戸が会員になった。地域の宝は地域全体で守ろうという、見事な結束力だった。

多い年で3万人は訪れるという見物客の中には、カタクリの花を分けてほしいという人もいるが、保存会はそれには一切応じない。観光開発でも利潤追求でもなく、地域の人たちの心の財産をどこまでも保全していくことが、会の一番の眼目なのだ。

八津・鎌足のカタクリは、遠方から訪れる人も夢見心地にさせてくれるが、地域に根ざして生きていく人たちの意識まで、変えたようである。

20ヘクターの奇跡